

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 22 日現在

機関番号：32678

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26381102

研究課題名(和文) 保育者のファーストステージを支える「成長感」を核とした養成と現職教育の連携

研究課題名(英文) Support Systems for Young ECEC Teachers Developing their Professional Identity : Linking Pre-Service and In-Service Education

研究代表者

内藤 知美 (NAITO, Tomomi)

東京都市大学・人間科学部・教授

研究者番号：10308330

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：保育の質向上には保育者の資質向上が不可欠であるが、保育者の早期離職率は高く、専門性を高めるとい状況にはない。そこで1)養成段階から現職への接続、2)「保育者になる」から「保育者である」というアイデンティティ形成、3)現職教育における成長支援システムについて検討した。養成段階ではプレ保育者としての自己評価は高いがファーストステージ(1-3年)では「保育者である」という意識が獲得できずクライシスを経験する。養成からキャリアパスを意識し「クライシスの構え」を形成すること、メンター制を導入することが効果的である。また成長意欲を支えるために「子どもの成長」への振り返りの機会を設けることが有効である。

研究成果の概要(英文)：In order to enhance the quality of ECEC, promoting professional qualifications for ECEC teachers is essential. However young ECEC teachers(1-3 years of experiences) suffer from anxiety and lose self-confidence and leave the field early. It is referred to as "First Stage Crisis" for ECEC teachers. This study aims to understand the characteristics of "First Stage Crisis" and identify its cause. This study focused on three aspects; 1) Persistent training programs for ECEC teachers in their transition period from novice to expert, 2) Development of ECEC teacher identity as a professional ECEC practitioner, 3) Implementation of effective support system for ECEC young teachers. Results; Professional consultation such as mentoring encourages ECEC teachers to overcome their career crisis. ECEC teachers realize their professional growth through interactions with children. Promoting opportunities for them to recognize results of their work efforts is an effective way to enhance their motivation.

研究分野：幼児教育

キーワード：保育者養成 現職教育 移行期 ファーストステージ・クライシス 評価(アセスメント) 振り返り

1. 研究開始当初の背景

OECD(2001・2006・2012・2015)の提言にみられるように、保育の質の向上には保育者の資質向上が不可欠である。しかし実際には資質向上に取り組む以前の問題として、保育者の早期離職率が高い。保育職につく学生は比較的早い段階から明確なキャリア意識を持ちながら、保育職の新任の段階において離職するということが、保育職の抱える問題の深さがある。

そこで、キャリア意識をもって保育職に就いた保育者が、ファーストステージにおいて抱えるクライシス(不安や葛藤、自信喪失、意欲低下等の総称)の内容と要因を明らかにし、保育者が早期離職を回避し、成長感を伴いながら保育者としての専門性を高める支援に取り組むたいと考えた。

2. 研究の目的

本研究では、ファーストステージの保育者がクライシスを回避し、「成長感」を持ちながら保育者としての専門性を高めるための支援を考えるために、実習を終えた養成段階のプレ保育者から、1-3年の新任の保育者におこるクライシスに着目し、「保育者としての成長の危機」の内容を検討する。

その際に、(1)養成段階から現職段階への接続の問題、特に学びの連続性の問題、(2)「保育者になる」から「保育者である」というアイデンティティの形成の問題、(3)現職段階での保育者の成長を支えるシステムの不在の問題を検討することで、具体的な保育者支援のあり方を提案する。

3. 研究の方法

プレ保育者である養成段階の学生とファーストステージ(ここでは保育経験1-3年とする)の現職保育者との「成長感」や葛藤・保育者としての課題についてのアンケートおよびインタビュー調査を行い、それぞれの特色を示した。また両者の意識のずれを比較検討した。さらに海外(ここではニュージーランド・オーストラリア)の保育記録や保育評価などが保育者の専門性とどのように結びついているのかを現地調査した。

4. 研究成果

プレ保育者である養成段階の学生とファーストステージの現職保育者を対象として行ったアンケートおよびインタビュー調査の結果は次のようである。

(1) 自己評価が高いプレ保育者

養成段階の学生に対して実習前・実習中・実習後にアンケート・インタビュー調査を実施した結果、保育者の能力や技術について修得すべき事項(22項目)は、11項目が実習前に修得しておくべきと考えられており、就職後に学ぶべきことは「保護者への対応」などの少数の項目のみであった。また実習前には

責任実習の計画、実習日誌の書き方などを含めて多くの項目を心配する割合が高いことがわかった。一方、実習後に行った実習における自己評価に関しては相対的に高い数値を示すとともに、実習指導担当の保育者がモデルとして機能するかどうか、保育者との関係性が影響を与えることが示唆された。

実習を通してのプレ保育者の自己評価は相対的に高く、「保育者になる」という意識をもって、プレ保育者としてのアイデンティティをある程度、良好に獲得していることが明らかになった。また養成段階の学びでは実習がうまくできるかどうか为主要な課題であり、現職教育との学びとの連続性の視点が弱いと言える。

(2)ファーストステージ保育者のクライシス

ファーストステージ保育者は「保育者になる」から「保育者である」という意識を抱く中間地点に位置する。ファーストステージ保育者は「保育者である」という意識をもつ前に、養成段階と現職段階の学びのずれを感じ、不安や葛藤、自信喪失、意欲低下等のクライシスを生じる。特に新任保育者1年目はこの不安が生じやすい時期であることが理解できた。新任保育者1年目の保育者の意識の変化を「～期」に分けて整理、分析した結果、以下ようになった。(表1参照)

表1. 保育者1年目の「期」による変化

期(4月~6月)	期(7月~9月)
見通しが無い。行事など園の流れがわからない。 職場の人間関係の不安が大きい。 「クラスをまとめる」「初めての行事」「保護者の対応」などで、実力が伴わない、申し訳ない気持ちがある。 特定の気になる子どもの姿は見えるが、対応する余裕はない。	職場の人間関係がわかる。 夏の暑さで体力的に疲れる。 クラスをまとめる、行事をこなすなどで常に緊張している。 特定の保護者との関係に不安がある。 特定の気になる子どもへの対応を考える。 日誌に気になる子どもの記録を書いているなど。 子どもの成長を感じることがある。(幼稚園・夏季休暇)
期(10月~12月)	期(1月~3月)
主要な行事が多い時期であり、他クラスとの評価を意識し、緊張する。 保育技術のなさを痛感する。 (気になる子どもだけではなく)行事を通じての子どもの成長を感じるがある。	見通しを持ち、事前準備し、できることが多くなる。 保育の楽しさを感じるようになる。 子どもの成長を感じるようになる。

保育者1年目の 期から 期にかけてが、保育者のアイデンティティに関わる質的転換期と考えられる。この時点では、子どもに関する言説が、保育に困難を抱えるなど特定の子どもの対するものから「一人ひとりの成長を感じる」という言説に変化している。期は、子どもの成長を感じる余裕ができたことで、保育の楽しさが発見されており、見通しをもって事前準備をし、保育を行うなど、保育者としての自信を育み、「保育者である」という意識が生まれている。

保育者が専門性を高め、成長する意欲をもって保育職を継続するためには、新任保育者が直面するファーストステージ・クライシスの内実を期に分けて整理し、養成段階から現職保育者への移行を踏まえて「クライシスへの構え」を育てておく必要がある。保育者養成段階においては、養成の最終目的が「実習」での成果におかれる傾向があるが、現職を視野に入れた長期のキャリアパスを踏まえて養成教育を行うことが必要である。

また養成段階から保育者としての自己に対する適切な認知（メンタライゼーション）能力を育成することが有効であり、その中でも言葉と行動の裏にある意図や動機を理解する直観的理解の能力の育成が有効であることが本研究を通じて明らかになった。

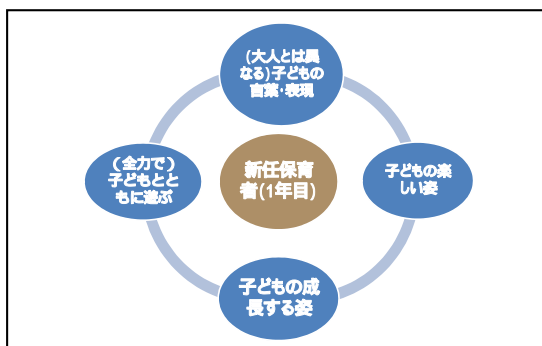


図1．保育者(1年目)としての喜び

ファーストステージ、特に1年目の保育者がクライシスを乗り越えるための支援として、子どもとの関係性が核となることがわかった。そして、保育現場において、保育者が子どもの成長に気づけるような振り返りを行う事や子どもとの関係の中での保育のフィードバックが有効である。また保育者としてのクライシスや成長感の停滞期を見据えたステップアップ・プログラム（得意分野の育成プログラム）を実施し、「自分なりの保育に自信を持つ」研修プログラム等が有効である。保育の技術・技量の獲得では、早急に画すべき技術・技能であるとともに、技術の獲得が「見える化」しやすい内容を初期の研修に含めることが保育者の自信を育てる。

これまでの日本の保育においては、基本的に保育者は、保育の専門性を獲得するためには先輩保育者等を「見て学ぶ」ことが重要だとされていたが、オーストラリア・ニュージ

ーランドでの実地調査からは、保育者が保育全般に対しての「気づき」を言語化し、サポートするといった、大学との連携型メンタープログラムが有効に機能していることが分かった。また多文化社会である両国では、学生たちはそれぞれ異なるバックグラウンドをもつため、家族を尊重し、自分自身が育ってきた環境や成長の過程を振り返り学ぶ機会が多くある。このことが多様なバックグラウンドをもつ子どもや保護者理解につながり、保育者自身の自己肯定感を育むことにもつながっていることがわかった。保育の記録・評価についても、保育者が「振り返り」を行う貴重な機会となっているといえる。

<引用・参考文献>

OECD Starting Strong (2001), Starting Strong (2006), Starting Strong (2012), Starting Strong (2015)

ジェームズ・J・ヘックマン(著)・古草秀子(翻訳) 幼児教育の経済学、東洋経済新報社、2015

秋田喜代美、保育者のライフステージと危機、発達 83号、Vol.21、ミネルヴァ書房、2000

5．主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計5件)

井戸ゆかり、亀田佐知子、幼児理解を深める演習課題 - 観察する力と観察記録を書く力の向上を目指した取り組み -、東京都市大学人間科学部紀要、査読無、第8号、2017、11 - 22

内藤知美、井戸ゆかり、小泉裕子、大野和男、田爪宏二「新任保育者1年目が抱えるクライシスとその構造 - 「保育者になる」から「保育者である」への移行に着目して -、東京都市大学人間科学部紀要、査読無、第8号、2017、37 - 45

田爪宏二、廣瀬真喜子、保育者志望短期大学生の実習経験および就学意識における保育者効力感の影響、京都大学大学院教育学研究科附属臨床教育実践研究センター紀要、査読無、19号、2016、2 - 12

増田裕子、田爪宏二、相澤雅文、教師志望学生における資質獲得とメンタライゼーション能力との関係、発達障害支援システム学研究(日本発達障害システム学会誌) 査読有、14号、2015、5 - 12

内藤知美・井戸ゆかり、ファーストステージクライシスの実態とその支援、東京都市大学人間科学部紀要、査読無、第6号、2015、35 - 44

〔学会発表〕(計 12 件)

田爪宏二、廣瀬真喜子、増田優子、保育所実習の経験や不安に対するメンタライゼーション能力の影響(2) - 実習の進行に伴う変化、日本発達心理学会、2017年3月26日、広島国際会議場(広島県広島市)

田爪宏二、廣瀬真喜子、増田優子、保育所実習におけるメンタライゼーション能力の影響 - 保育者効力感および保育(者)観の変化との関連から、日本教育心理学会、2016年10月18日、サンポートホール高松(香川県高松市)

NAITO Tomomi, A Study of ECEC Students Who Participated in the Child-Rearing Support Training, OMEP 68th World Assembly and Conference, 2016/07/07, Seoul (Korea)

田爪宏二、廣瀬真喜子、増田裕子(2016)保育所実習の経験や不安に対するメンタライゼーション能力の影響、日本発達心理学会、2016年5月1日、北海道大学(北海道札幌市)

大野和男、小泉裕子、内藤知美、井戸ゆかり、田爪宏二、ファーストステージクライシスの問題、日本保育学会第69回大会、2016年5月7日、東京学芸大学(東京都小金井市)

田爪宏二、保育実習における不安と保育(者)観の変化におよぼす保育者効力感の効果、日本教育心理学会第57回総会、2015年8月26日、朱鷺メッセ(新潟市)

YOSHINAGA Mutsuko, NAITO Tomomi, BEPPU Ryoko, A Study of Teaching Practice Development of Students Who Participate in the Child-Rearing Support Center in Japan, The 67th World Assembly and Conference, 2015/07/31, Washington DC (USA)

TAZUME Hirotugu, Kindergarten Teachers' Practical Knowledge and Support for Early Childhood Numerical Cognition, OMEP 67th World Assembly and Conference, 2015/07/31, Washington DC (USA)

内藤知美、井戸ゆかり、小泉裕子、大野和男、田爪宏二、ファーストステージクライシス(3) - 新任保育者の振り返りから -、日本保育学会第68回大会、日本保育学会第68回大会、2015年5月10日、椋山女学園大学(愛知県名古屋)

NAITO Tomomi, The Study about Teaching Practice Development of the ECEC Students, The 66th OMEP World Conference, 2014/07/03 University College Cork, Cork City (Ireland)

井戸ゆかり、内藤知美、小泉裕子、大野和男、ファーストステージクライシス(2) - 保育者ニーズを踏まえた支援、日本保育学会第67回大会、2014年5月14日、大阪総合保育大学(大阪府大阪市)

小泉裕子、大野和男、井戸ゆかり、内藤知美、ファーストステージクライシス(1) - プレ保育者の成長調査より -、日本保育学会第67回大会、2014年5月14日、大阪総合保育大学(大阪府大阪市)

5)〔図書〕(計3件)

田爪宏二編著、保育の心理学、あいり出版、2017年、279頁(1-12、65-77、139-150)

石井昭義、小原敏郎編、内藤知美ほか、建帛社、保育者のためのキャリア形成、2015年、140頁(93-102)

諸富詳彦、富田久枝編、田爪宏二ほか、ぎょうせい、保育現場で使えるカウンセリング・テクニック、2015年、165頁(66-73、-101、130-141)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

6. 研究組織

(1)研究代表者

内藤 知美 (NAITO, Tomomi)
東京都市大学・人間科学部・教授
研究者番号：10308330

(2)研究分担者

田爪宏二 (TAZUME, Hirotugu)
京都教育大学・教育学部・准教授
研究者番号：20310865

(3)研究分担者

大野和男 (OHNO, Kazuo)
鎌倉女子大学・児童学部・准教授
研究者番号：40339487

(4)研究分担者

井戸ゆかり (IDO, Yukari)
東京都市大学・人間科学部・教授
研究者番号：60331500

(5)研究分担者

小泉優子 (KOIZUMI, Yuko)
鎌倉女子大学・児童学部・教授
研究者番号：80310465